

誰もが使える「凶器」

昭和町立押原中学校三年 塩田 一颯

「あいつはフィリピン人だから。」

この言葉は、僕の心に深い傷を与えた凶器だ。

僕の母はフィリピン人、父は日本人、僕はいわゆるハーフだ。小学校に入学してから、ことあるごとにハーフというだけで悲惨な体験をした。例えば、給食を食べるのが遅かった時のことだ。

「あいつはフィリピン人だからはしが上手く使えないんだよ。手で食べればいい。」

と、言われた。僕は手で食べたことなんてない。いつもはしを使って食べている。また友達とケンカした時にはこう言われた。

「あいつはフィリピン人だからすぐカッとなって手が出るんだよ。」

先に手を出してきたのは向こうなのにな。

そして、ある日の休み時間のことだ。友達と遊ぶことに夢中になり、僕を含めた何人かが授業に遅れてしまった。その時皆は、「フィリピン人だから時間を守れないんだろ。」「時間を守れないんだからフィリピン人は遊びに行くな。」

と、明らかに僕への批判が厳しかった。先生にも相談したが、先生達は、僕が食べるのが遅かったり、授業に遅れるのが悪いのであって、皆は悪くない、普通のことを言っているだけだ、とまともにとり合ってもらえなかった。

僕は、仮病を使い学校を休むようになった。しかし、両親の励ましで見返してやるという気持ちを持てたことで立ち直り、今では元気に暮らしている。だが、これらの経験は今も僕の心に、一生消えないであろう深く、大きな傷を残している。

ここ最近、アメリカでの黒人差別問題や、中国でのウイグル民族弾圧問題など、人種による差別が世界的な社会問題となっている。日本人はそれに真摯に向き合っているだろうか。日本ではそこまで大きな差別は無いと思っている人が多いがそれは大きな間違いである。少なくとも僕の経験上では、日本人は多くの差別をしている。僕の小学校時代の体験もその一つだが他にも、テレビで芸人が黒人差別ととれるような言動をしていたり、韓国人に対してのヘイトスピーチがある。

果たして、生まれた場所や肌や目、髪の色で、一体僕達の何が分かるというのか。

なぜ僕が差別により悲しむのか、なぜ人々が差別に対し怒るのか、それは人々の目や肌の色が違うだけで、他は全て皆と一緒にだからである。特別扱いしてほしいのではなく、皆と同じ様に扱ってほしいだけなのだ。生まれた時点で差別の対象になる。そんなことは絶対に許されてはいけない。

その上で僕が主張したいことは「言葉」というものの重みである。

言葉は便利なもので、人とのコミュニケーションはもちろん、この文章のように、他人にメッセージを伝えることができ、人類の発展に欠かせないものであった。しかしそれとは裏腹に差別や暴言で人を傷つけたりすることもできる。時にそれは一生残る大きな傷となり、人を死に追いやることもある。そしてなにより恐ろしいのが、誰でも簡単に使用できるという点だ。つまり、言葉は最も手軽で身近な「凶器」になりえるのだ。

この「凶器」を無意識に振りかざしてしまっている人は多い。「女性だから〇〇だよね。」「外国人だから〇〇だよね。」など、相手への気遣いのつもりが、逆に相手を傷つけていることがある。皆さんは自分の偏った考えを他人に押しつけてないだろうか。

言葉は正しく利用すればとても有益なものだが、使い方を誤れば、たちまち恐ろしい「凶器」になってしまう。言葉を使うとき、その言葉には差別ととれるようなことはないか、これを言って傷つく人はいないか、自分は相手にとっての「凶器」を使おうとしていないか、など常に相手の立場に立って発言をしてほしい。

「言葉」という人しか使うことができないものの重みを一人一人が十分に見直すべきである。自分の言葉で人の心を傷つける前に。